

ゴブリンの手紙

素人目

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある男が言った。「ゴブリンどもは皆殺しだ」
それを聞いた者が言った。「さて、早まるな」

四方世界に、良いゴブリンを投入しました。

にわかです。もしおかしな点があっても、あしからず。

なお、不定期更新です。

目次

ゴブリンの手紙
——
1

本編

早朝・辺境の村にて
——
6

ゴブリンの手紙

背が低く、耳が尖っている者。すなわち、あなた達がゴブリンと呼ぶ者らの一部の民から、肌が白く、頭の毛が豊かな者。またはその者らと寝食を共にする全ての知性ある者へ。

あなた達に、我らのことを知らせるために、この手紙を送る。真に、これに書き記されているものは真実であり、我らに属する全ての者について述べた物である。

さて、まずは我らのことについて、少し書き記さなくてはならない。

我らはホウボウの民である。ホウボウとは、放浪した者の意である。我らは月が1つの地で生まれ、天の御業と地の慈愛によって、この地に送られてきた。

我らが生まれた地には、ラウディがいた。彼らは力が強く、戦いに長けていた。また、非常に数が多く、時には鉄の刃と鉄の衣で身を固めていた。

そして彼らは、我らに攻めかかってきた。我らは同胞と受け継がれた地を守るためラウデイと戦い、彼らを追い返した。

しかし、戦いで多くの同胞が倒れたので、女子供の嘆きが三日三晩響き渡った。多くの戦士も涙を流した。

我らは、自分達の住処や、その他のあらゆる受け継ぎの地の防備を固めるため、数々の砦を築いた。

また戦争の武器、すなわち、鋭い鍬の矢と矢筒、あらゆる刃と毒、身を守る厚い衣と兜を造り、更に戦争のために全ての準備を整えた。

一部の同胞は、我らとラウデイの間に和平の誓いを結ばせようと、熱心に努めていた。しかし、その働きは無益に終わった。ラウデイが皆強情なわけでは無かったが、ほとんどのラウデイは憎悪を凝り固めていた。また、同胞が殺されたことにより、我らの中にはラウデイを憎む者が大勢いた。

そしてついに、ラウデイの長が戦士を引き連れ、我らに迫ってきた。ラウデイの数は非常に多く、数えることが出来なかった。

ラウデイから逃げることは出来なかった。背後には氷を纏った高い山が連なってお

り、行く手を阻んでいるからである。

我らはラウデイと戦うため、得られる限りの力を使おうと、全ての同胞を集めた。男も女も子供も、武器で身を固め、戦いのいでたちで集まった。

我らは数ある砦を使い、ラウデイと大いに戦ったが、砦は次々と落とされた。我らは度々殺された同胞のために泣き叫び、悲しんだ。泣き叫び、悲しむ声は声は非常に大きく、その声は隣の砦に届くほどであった。

そこで我らは、これ以上に同胞の血が流れないように、天と地に対して祈った。

その願いは、地の慈悲によつて聞き届けられ、天の御業によつて成就した。天は、我らをラウデイの見当たらない地へ送らせた。

我らがホウボウの民、すなわち放浪した者と名乗ったのは、このためである。

さて、これらを事を知つた知性のある者は、この地に元々いたゴブリンと呼ばれる存在と我らが、全く異なる存在であることが分かるであろう。

彼らは、ラウデイより邪悪な存在である。我らと姿が似ており、言葉も通じるが、彼らは野蛮で残忍で流血を好み、汚れに満ちている。また、我らを攻撃し、物や食料を奪

おうとしてくる。

そこで我らは、彼らを強盗と呼んでいる。強盗の存在により、我らはこの地でも堀と土手を築き、杭で柵を造り、罾を張り巡らせて、守りを固めなくてはいけなくなつた。

肌が白く、頭の毛が豊かな者。またはその者らと寝食を共にする全ての知性ある者よ、どうか我らと強盗を区別し、我らと戦わないでほしい。そして、あなた達の同胞に、この手紙にあることを正しく伝えてもらいたい。

我らが戦うのは、ラウデイと強盗で十分である。我らはもう、嘆きの声は聞きたくない。

我らは、青と緑の布を首元に巻いている。そして、もしあなた達の前に現れるならば、ホウボウと名乗ろう。

我らに使いを出すならば、あなた達が森人の山砦と呼ぶ、打ち捨てられた砦跡に来ると良い。そこで同胞の戦士と会えるだろう。

我らホウボウの民と、これを読む全ての者の平和を願ひ、この手紙を結ぶ。

代筆
鋼鉄等級冒険者

本編

早朝・辺境の村にて

目覚めは、カンカンと聞き慣れない音でもたらされた。
古ぼけた机から身を起こし、今の状況を考える。

「……………ああ、寝落ちか」

この体は、かなり疲れが溜まっていたらしい。休憩のつもりだったが、一晩寝過ぎしてしまった。雨戸の隙間から、日の光が差し込んでいる。窓を開ければ、すぐに早朝の冷気が部屋を満たした。

風邪を引かなくて良かった。今日のサイコロの出目は良いらしい。
背中を伸ばし、凝り固まった筋を伸ばす。

ゴリツと嫌な音が聞こえた。どこが鳴ったのかは考えたくない。俺も歳だというのか。まだまだ元気なつもりだったのだが。

「動かしても……大丈夫か。って、水がめが空じゃないか。おいつ、朝の水汲み担当は………今は居なかったな」

顔を洗いたかったが仕方ない。水桶を肩に担ぎ、村の中心にある井戸に向かう。腰が壊れなくて良かった。

ゴブリンに娘が拐われてから、もう7日だ。帰ってくる兆しはない。

奴らの巣窟へと何人か鋼鉄等級の冒険者が向ったが、村を出発して以降、何の音沙汰もない。制圧に失敗したのだろう。

だというのに、1日は変わらず巡っている。

朝の水汲みを俺がするようになった。拾える薪の量が減った。後は妻の生活習慣が少し狂った。それぐらいだ。

ほとんど代わり映えない日常では、これらの変化は大きなものだ。だが、せいぜいその程度だ。日常という範疇に収まってしまっている。

この程度なのか。娘一人失って、たったこれしか変わらないのか？
こんなものでは、あつという間に慣れてしまいそうだ。

……だめだ。いま考えても仕方ない。

井戸の傍らで上着を脱ぎ、頭から水をかぶる。井戸水は痛いほど冷たく、思わず息を呑む。全身の皮が縮んだようだ。

そして少し後悔する。体を拭く物がない。乾いた布といえば、さつき脱ぎ捨てた上着しかない。寒い。

「何やってんだ炭焼き。そらっ」

「つと、ああ、猟師か」

振り返れば、猟師が手ぬぐいを投げつけて来た。弓と矢筒を背負っているのを見るに、これから山に入るのだろうか？

「助かる。このままじゃ凍えるところだった」

「気をつけろよ。しばらくは元気でいて貰わなきゃ困る」
「あ？どういことだ」

カンカン、と、山から音がしてくる。

鐘の音ではない。この村に鐘はない。

それは不規則なようで規則的なリズムを刻み、よく乾いた硬い木材同士か、あるいは金属同士を叩き合わせているような音だった。

「……この音だ。お前は昨日何してた？」

「ずっと窯にへばりついてたな」

「なら知らないか。山奥で昨日から鳴ってるんだ。それも複数の方向からカンカンとね。うちの犬が興奮しっぱなしだったよ」

「自然の音、じゃないよな？」

「たまにだが笛の音も聞こえた。明らかに誰かが鳴らしている」

音が聞こえてきた方向に村はない。冒険者ならば村に降りてくればいい。

「……………ゴブリンか？」

「さあ？ゴブリンが笛を吹くなんて聞いたことがない。もしもゴブリンだったら、よっぽど頭が良い個体だろうね」

ゴブリンの存在を思い出せば、自然と手が拳を握る。怒りがふつつつと湧き上がる。娘が連れ去られる光景は、しっかりと脳裏に焼き付いている。

家の裏山で目を離れた際に、投石で娘が気絶させられていたこと。娘の首筋にナイフを当てられ、下手に動けなかったこと。群れでゲラゲラと笑いながら、娘を引きずって立ち去るあの姿！

「……………ゴブリンか盗賊の類か。正体は分からないが、敵だと思ってい。友好的な存在だったら、村に降りて話かけるだけでいいからね」

猟師は皮袋を手に取り、井戸水を詰めた。ふくらんだ皮袋を腰に結え、ついでに小物を整理する。

「この村では、お前が1番力が強い。俺は山に入って状況を見てくる。村になにかあつ

たら頼む」

「……娘一人すら、助けに行けない男にか？」

「なら守れよ。お前が強いことに変わりはない。後は妻と小さい息子だったか？もう家族を失いたくないだろ？」

……妻の体調は、あまりよくない。娘を拐われたショックと不安から夜遅くまで眠れず、昼前にベットから起きてくる。息子の前では何とか笑っているが、いつまで持つか分からない。息子も何かを悟ったのか、ここ数日は口数が少ない。

もしも息子までいなくなったら？あるいは妻が拐われたら？

「ひとまずゴブリンは、斧で叩き割ってやる」

「その意気だ………ん？」

犬が激しく吠え立てるのが聞こえた。かなり興奮しているのか、一向になきやまな
い。

これには聞き覚えがある。猟師の犬だ。

「わかった。ついでに斧を取ってくる」

急いで上着を着て走り出す。その勢いのまま戸を叩き、声を張る。

「村長つ、起きてくれ！」



村長に事情を説明したあと、すぐに家に向かった。

何事もない様子に安心するのも束の間、寝ている妻を起こして、壁に立て掛けてある斧を持つ。

「なにかが村に来たようだ。恐らく良い相手じゃない。俺は村外れに行く。猟師の家の

方だ。息子を頼む」

「……………っ！大丈夫なの!？」

「何とかする。戸締まりをしつかりしとけ。くれぐれも拐われるなよ！」

それだけ伝えると、すぐに家を出る。

村外れにつけば、すでに村の男共が集まっているのが見えた。ピッチフォークや斧、鉋を手に取っている。

「遅くなった。豚飼い、状況はどうなっている？」

「炭焼きか。それがわからねえんだ」

「は？」

「何かいるのは違えねえんだが、姿が見えねえ。ただカンカン鳴ってるだけ」

「ゴブリンだ！キャベツ畑の方にいるぞ！」

その声が響くやいなや、皆の目が一斉にキャベツ畑に向く。

それを見たとき、まずは困惑した。

畑と雑木林の合間を歩く群れを、何かと見間違えたのかと思った。

どこかまとまりを感じる動きに、鉄帽を被り、布と毛皮を全身に纏った姿を見て、
人の集団が迷い込んできたのかと思った。

だが、鉄帽の鍔の下から覗かせる顔は、間違はなくゴブリンで、
何匹かで肩に担いでいるのは、どう見ても人だった。

「人質かっ！」

「炭焼きの娘と同じだ」

「俺が弓で仕留める。この距離なら外さない。脅迫する暇なんて与えない」

「頼む。俺は回り込んで襲う」

「よし、炭焼きに続くぞ！」

ブンツと矢を放つ音が聞こえた。斧を握りしめ、奴らの元へと駆け出す。
だが、ゴブリン共を血祭りに上げることが出来なかった。

獵師の弓は、確かにゴブリンの胸に命中した。しかし、そのゴ布林はうずくまりはしたが、倒れなかった。胸に何か仕込んでいたらしい。

問題はその後のことだった。

奴らは驚くほど素早く動き、木々を盾にした。獵師の弓の射線を切ったのだ。

更にその直後、カンカンとあの音が響くやいなや、森のあちこちから矢が飛んでくる。

「矢だっ!」

「いぎつ、痛つてえ!」

「隠れろ! 的にされるぞっ!」

その声を聞いた各々が、急いで家や荷車の影に隠れる。

矢の雨はすぐに止んだ。恐る恐る顔を出せば、ゴ布林は一匹残らず消えていた。

まんまと逃げられた。

「……………豚飼い、大丈夫か?」

「痛え……………腕が」

見れば、二の腕に矢が突き刺さっている。

傷口あたりの布を裂いてみれば、あまり深くは刺さっていないようだ。

所詮はゴブリンだ。弓を引く力は貧弱らしい。

「矢は浅いところで止まっている。良かったな豚飼い。お前の筋肉が矢を止めたぞ」

「ハッ……言ってくれ」

「村長から解毒剤をもらえ。毒が塗られれたら事だ」

応急処置は他の人に頼み、自分は獵師の方へ向かう。

獵師はゴブリンが去ったというのに、弓を片手に油断なく辺りを見回していた。

「獵師、いい弓の腕前だな」

「皮肉はよしてくれ。人質が肩に担がれていた以上、胴を狙うしかなかった」

「皮肉じゃない。防がれたのはともかく、矢は吸い込まれるように当たっただろう。防がれたのだって、しっかりと胸の中心にある板か何かを捉えたと言うことだしな」

実際、あの場で当てられる人間は多くないだろう。人質に当てないように、動いてい

るゴブリンの体の中心に当てるのだ。称賛に値する腕前だ。

いや、まずはそれより聞くことがある。

「獵師、人質の顔は見えたか？」

「……………ああ。いつぞやの冒険者だった。酷い顔だったが、死体じゃないと思う」

「そうか……………」

「炭焼き、もう時間が経ち過ぎている。お前の娘が生きているかすら」

「わかっている。だが夢を見させてくれ」

ゴブリンは女を捕まえると、繁殖のためにはらみ袋にする。

無事ではないだろう。だが、まだ生きている可能性がある。

「まずは村の皆で話し合うんだ。奴らは村の手に負えない。冒険者を雇うのもタダじゃない」

「……………そうだな」

山から、カンカンと音が聞こえる。その後、かすかに笛の

よ
う
な
音
も
聞
こ
え
た
。

首
を
洗
っ
て
待
っ
て
い
ろ
。

何
時
に
な
る
か
は
分
か
ら
な
い
が
、
絶
対
に
皆
殺
し
に
し
て
や
る
。